# ロールシャッハテストの体験型と統合型 HTP の関連について

## The association between the Rorschach Erlebnistypus and the synthetic house-tree-person drawings

浅　野　　正*
Tadashi ASANO

**要旨**：ロールシャッハテストで内向型の人は統合型 HTP で人物を木に、外拡型では人物を家に近づけて描きやすく、人物を家の中に描く人は内向型が多かったとする根本（1998）の研究について、精神病院での 41 名の患者を調査対象として追試を行った。その結果、内向型で人物を木に、外拡型で人物を家に近づけるという傾向は表れなかった。しかし、人物を家の中に描く人は内向型が多かった。別の分類方法として、木と家とを区別せず、人物が木や家と接近しているか離れているかという観点から、接近群と遠距離群を設けて分析を行ったところ、ロールシャッハテストが外拡型の人は、統合型 HTP で人物を木・家に接近させて描きやすいことが示唆された。外拡型の人は自己と環境との相互作用により基本的な充足感を得るという外拡型の基本概念が、人物を木・家に接近させるという統合型 HTP の描き方に表れているのではないかと考察された。

**キーワード：統合型 HTP，ロールシャッハテスト，体験型，心理アセスメント**

## Ⅰ　問題と目的

統合型 HTP とロールシャッハテストは、同じ投映法心理検査であるが、それぞれがとらえやすい性格領域が異なっている。その点に留意してテスト・バッテリーを行うと、臨床心理実践の中で 2 つの心理検査を上手く活用することができる。統合型 HTP は、一枚の画用紙に家と木と人を描くという描画テストである。描かれた人物は意識的な自己像を、樹木は無意識的な自己像を、家は家族への意識を表すとされている。一枚の画用紙は、対象者を取り巻く生活空間と理解され、3 つのアイテムの描き方の中に自己と環境との相互作用が表現されやすいと解される。一方で、ロールシャッハテストは、特に包括システムによる方法の場合、感情のクラスター、思考のクラスター、自己・対人知覚のクラスターといったように、心理内容の類似した変数や指標の集合である複数のクラスターが設定されている。統合型 HTP は特に自他の相互作用を、ロールシャッハテストは自他関係を含みながら、それ以外の性格の諸側面を幅広くとらえているという理解も可能である。

この点に着目して、浅野（2014）は、2 つの心理検査の関連を調べている。特に抑うつに着目して 2 つの心理検査の関連を調べた結果、ロールシャッハテストの抑うつ指標よりも対処力不全指標の方が、統合型 HTP の抑うつ傾向を示す描画特徴と強い関連を示したことを報告してい

* あさの ただし　文教大学人間科学部

る。そして、抑うつにつながる性格傾向の中でも、抑うつ指標に示される情緒面での脆弱さや悲観的な認知特徴よりも、対処力不全指標に示される対人関係の機能不全や社会生活に対処する能力の欠損の方が、統合型 HTP の中に表れやすいと考察している。また、浅野（2015）は、ロールシャッハテストの対人知覚の指標である警戒心過剰指標と統合型 HTP の描画特徴との関連も調べている。その結果、警戒心過剰指標が陽性である対象者ほど、統合型 HTP の中の 3 つのアイテムを統合して、遠近感や奥行きを表現した絵を描いていた。これらの研究からは、特に対人関係に関するロールシャッハテストの変数や指標が、それ以外の性格の側面に関する変数や指標と比較すると、統合型 HTP の描画特徴と関連を示しやすいことがうかがえる。

やや古い研究となるが、ロールシャッハテストと統合型 HTP との関連を調査したものに、根本（1998）の研究がある。この研究では、統合型 HTP で人物を家に関係づけて描く場合は家族に、人物を木に関係づけている場合には深い部分の自己に拠り所を求めるという三上（1995）の主張を、ロールシャッハテストの体験型と統合型 HTP の人・家・木の位置との関連を調べることで実証的に確認しようとしている。そして、大学生 80 名のデータを分析した結果、ロールシャッハテストで内向型の人は統合型 HTP で人物を木に近く描く一方で、外拡型の人は人物を家に近く描きやすく、さらに人物を家の中に描く人は内向型が多かったことを報告している。

本研究は、この根本（1998）の研究の追試であり、精神病院患者の臨床群のデータでも同様の傾向があるかを検証する。その際、ロールシャッハテストの体験型や、統合型 HTP の人物と家・木との位置関係の分類は、なるべく根本（1998）の方法に合わせたい。すなわち、根本（1998）の研究では、人物を家・木のいずれのアイテム寄りに描くかにより、木寄り群と家寄り群、さらに家と木の中間に人物を描く中間群と、家の中に人物を描く群の 4 つの群を設定しているため、本研究でもこの群分けの方法を踏襲する。

それに加えて、この 4 つの群分けとは別に、人物を家・木に接近させて描いているか、人物を家・木と遠くに離れた位置に描いているかという新たな分類方法も導入したい。これは、統合型 HTP では、一枚の同じ画用紙の中に人・家・木の 3 つのアイテムを描くことから、樹木は無意識的な自己像というよりも、対象者の持つ他者像が表れることがあり、そのため、人物が家・木のどちらに近いかということ以上に、家であっても木であってもそれらとの物理的距離は、対象者が抱く自分を取り巻く環境との心理的距離を示すとも考えられるからである。そして、この調査結果について、統合型 HTP は自他の相互作用を、ロールシャッハテストはそれ以外の性格の諸側面も幅広くとらえているという視点から考察したい。

## Ⅱ　方　法

### １．調査対象

心理アセスメントのテスト・バッテリーとして統合型 HTP とロールシャッハテストを実施した精神病院での 41 名の患者を調査対象とした（平均年齢 33.0 歳，男性 19 名，女性 22 名）。41 名の主訴は様々である。ただし、その中でうつ病が主診断であるか，診断にうつ病は含まれないが，抑うつ症状が認められた患者が 18 名だった。なお、41 名の中に統合失調症患者は含まれていない。

### ２．評定項目と分析方法

ロールシャッハテストの施行法およびコーディングは、包括システムに準拠した（Exner, 2001/2003）。体験型は、包括システムの基準に従った。すなわち、まず人間運動反応（M）と重みづけした色彩反応の合計（WSumC = 0.5 × FC+1.0 × CF+1.5 × C）を算出し、M と WSumC の合計を EB（Erlebnistypus）とした場合、EB が 10 以下であれば、どちらか片方の

値がもう一方の値よりも 2 以上大きい場合、EB が 10 より大きければ、どちらか片方の値がもう一方の値よりも 2.5 以上大きい場合に体験型を特定できる。そして、M が大きい場合は内向型（Introversive）、WSumC が大きい場合は、外拡型（Extratensive）、2 つの値にはっきりした差がない場合は、不定型（Ambitent）とした（Exner, 2000/2002）。包括システムでは、ラムダ（Lambda：総反応数と形態反応により算出される）の値が 1.0 を超える場合、体験型は回避型（Avoidant）とするが、根本（1998）は片口法に準拠しており、回避型を設定していないことから、本研究でも回避型は考慮しなかった。包括システムによるロールシャッハテストのコーディングは評定者 2 名で行い、評定が異なった場合は協議を行い確定した。なお、根本（1998）の研究では、体験型について、M が WSumC の 2 倍以上であれば内向型、WSumC が M の 2 倍以上であれば外拡型、その間ならば両向型としており、体験型の定義が本研究と異なっている。

統合型 HTP の家、木、人物の位置関係については、まず根本（1998）の研究と同じ分類を用いた。すなわち、人物と木との距離、人物と家との距離をそれぞれ測定し、人物が家よりも木と近いか（以下：木寄り群）、人物が木よりも家と近いか（以下：家寄り群）、人物が木と家の中間に位置するか（以下：中間群）、あるいは人物を家の中に描いているか（以下：家の中群）の 4 群を設定した。中間群については、人物と木の距離と、人物と家の距離の差が 1 センチ以下である場合に、人物が木と家の中間にいるとした。また、複数の人物が描かれて、木寄りの人と家寄りの人の両方がいる場合も中間群とした。ただし、複数の人物が描かれても、1 人は中間に位置しており、もう 1 人が木寄り・家寄りである場合は、木寄り群・家寄り群として分類した。複数の人物のうちの 1 人でも家の中にいれば、それ以外の人物は家の外にいても、家の中群とした。なお、根本（1998）の研究では、家寄り・木寄りの両方に人物を描いた場合は中間群とする点は本研究と同じであるが、人物と木・家の距離の差がどの程度であれば木寄り・家寄りとするかについて具体的な距離を設定しての明確な定義は示されていない。

また、根本（1998）とは異なる分類として、木寄り群、家寄り群、中間群のいずれかに分類された統合型 HTP について、人物が木か家のいずれかと接近しているか（以下：接近群）、人物が木とも家とも離れて描かれているか（以下：遠距離群）の 2 つに分類した。具体的には、人物と木の距離、あるいは人物と家の距離のどちらかが 1 センチ以下であれば、人物が木か家のいずれかと接近していると判断し、それらの距離がどちらも 1 センチを超える場合に、遠距離群とした。複数の人物が描かれた時は、そのうち 1 人でも木との距離か家との距離を 1 センチ以下に描いていれば、接近群とした。なお、この根本（1998）と異なる分類でも家の中群はそのままとし、接近群、遠距離群、家の中群の 3 群の分類とした。

統合型 HTP を人物と木・家との距離に基づいて、まずは木寄り群、家寄り群、中間群、家の中群の 4 群で分類し、次に別の分け方として接近群、遠距離群、家の中群の 3 群で分類し、その 2 通りの分類のそれぞれについて、ロールシャッハテストの体験型、すなわち内向型、外拡型、不定型による人数差を、$\chi^2$ 検定により検討した。

## Ⅲ　結　果

統合型 HTP で人物を木寄り、家寄り、中間、家の中のいずれに描いたかということと、ロールシャッハテストの体験型との関連を分析した結果は表 1 の通りである。結果としては、それぞれの該当人数に有意差は認められなかった（$\chi^2(6) = 7.333$, $p = .291$）。対象者 41 名のうち、内向型が 17 名、外拡型が 7 名、不定型が 17 名だった。内向型 17 名のうち、人物を木寄りに描いた人は 6 名、人物を家の中に描いた人は 4 名だった。外拡型 7 名のうち、人物を家寄りに描いた人は 3 名だった。

表１　統合型 HTP の人物と木・家との距離による４分類とロ・テストの体験型

| | 内向型 | 外拡型 | 不定型 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 木寄り | 6 | 3 | 7 | 16 |
| 家寄り | 4 | 3 | 8 | 15 |
| 中　間 | 3 | 1 | 2 | 6 |
| 家の中 | 4 | 0 | 0 | 4 |
| 合　計 | 17 | 7 | 17 | 41 |

$\chi^2 = 7.333,\ df = 6,\ p = .291$

次に統合型 HTP の描き方において、人物が木や家と接近しているか離れているかという観点から、接近群と遠距離群、そして人物を家の中に描く群を含めた３群を設定し、ロールシャッハテストの体験型ごとの該当人数を比較したところ有意差が認められた。その結果を、表２に示す（$\chi^2(4) = 10.315,\ p = .035$）。残差分析の結果、ロールシャッハテストの内向型において、統合型 HTP の家の中群の該当人数が期待度数を上回り（Z = 2.5）、またロールシャッハテストの外拡型において、統合型 HTP の接近群の該当人数が期待度数を上回っていた（Z = 2.1）。表２が示す通り、統合型 HTP で人物を家の中に描いた人は、対象者 41 名のうち４名であるが、そのすべてがロールシャッハテストの体験型が内向型だった。また、ロールシャッハテストの体験型が外拡型の人は７名いる中で、５名が統合型 HTP で人物を木・家と接近させて描いていた。すなわち、統合型 HTP で人物を家の中に描く人は、ロールシャッハテストの体験型が内向型であることが多く、ロールシャッハテストが外拡型の人は、統合型 HTP で人物を木・家に接近させて描きやすいことが示唆された。

表２　統合型 HTP の人物と木・家との距離による３分類とロ・テストの体験型

| | 内向型 | 外拡型 | 不定型 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 接　近 | 5 | 5 ▲ | 5 | 15 |
| 遠距離 | 8 | 2 | 12 | 22 |
| 家の中 | 4 ▲ | 0 | 0 | 4 |
| 合　計 | 17 | 7 | 17 | 41 |

$\chi^2 = 10.315,\ df = 4,\ p = .035$　▲：期待値を上回る度数

## Ⅳ　考　察

本研究では、統合型 HTP を木寄り群、家寄り群、中間群、家の中群の４つに分類して根本（1998）の研究の追試を行ったところ、ロールシャッハテストで内向型の人は統合型 HTP で人物を木に近い位置に描きやすく、外拡型の人は人物を家に近い位置に描きやすいという、根本（1998）の報告と同様の結果は得られなかった。その理由として、本研究は大学生ではなく精神病院患者を対象者としていたことや、対象者数が 41 名と少なかったこと、さらにロールシャッハテストの施行法や体験型の定義が異なっていたということが考えられる。また、根本（1998）の研究では対象者である 80 名の大学生の平均年齢は 20.7 歳であったところ、本研究の対象者の平均年齢は 33.0 歳であり、年齢がやや上であるという違いもあった。統合型 HTP で人物を木に関係づけている場合には、より深い部分の自己を拠り所にするという三上（1995）の主張は、特に青年期の対象者が描く統合型 HTP にはあてはまるが、加齢に伴い青年期的な心性が薄れるに従って、こうした描画特徴が表れにくくなるということがあるかもしれない。

次に、根本（1998）とは別の分類として、人物が木や家と接近しているか離れているかという観点で接近群と遠距離群を設け、家の中群は根本（1998）と同様のままとした３群で、ロールシャッハテストの体験型との関連を分析した。その結果、家の中群については根本（1998）の調

査結果と同様に、ロールシャッハテストの体験型が内向型であることが多かった。根本（1998）は研究の考察の中で、家の中群については家の中に閉じこもるという描画表現から、現実に対する順応の弱さなどの特徴を有する可能性を示唆している。こうした描画表現と社会不適応の関連は、年齢層がやや上の精神病院患者群にも同様に見られるかもしれない。

さらに、接近群と遠距離群の調査結果からは、ロールシャッハテストが外拡型の人は、統合型 HTP で人物を木・家に接近させて描きやすいことが示唆された。この調査結果を、ロールシャッハの体験型の観点からどのように意味づければよいだろうか？外拡型のそもそもの基本概念に立ち返ると、ロールシャッハテストで色彩反応（WSumC）が優位である外拡型の人は、自身と世界との相互作用を使用してより基本的なニーズを充足させる傾向にある（Exner，1995）。外拡型の人は、内向型の人と比べると、外界に対して感情を率直に表現する。感情を思考にまじらせ、緻密さに欠いた漠然とした論理体系を受け入れることも外拡型の特徴であり、問題解決や意思決定に際しては代替案を熟慮することなく、試行錯誤的に行動する（Exner，2000/2002）。また、色彩反応は、問題解決場面において感情表現的なやり方を好むことを意味するが、濃淡反応と異なり、状況に応じて感情を外に出すことをやめるという統制も可能であり、その意味で、社会適応に資する内的資源と解される（Weiner，1998/2005）。

統合型 HTP では、対象者の生活空間を表す一枚の画用紙に、自己、他者、家族を示す複数のアイテムを描くため、自己と環境との相互作用が表現されやすいとされる。一方で、ロールシャッハテストでは、感情、思考、統制力などといった性格の諸側面を幅広くとらえることが可能であり、特に体験型が外拡型の人の場合、上述したような性格特徴が感情、思考、統制力といった領域に表れることが推測できる。こうした感情、思考、統制力などの複雑な性格特徴を統合型 HTP の描き方から推測することは難しいだろう。しかし、統合型 HTP の場合、外拡型のそもそもの基本概念、すなわち外拡型の人は自身と世界との相互作用により基本的な充足感を得る傾向にあるという命題が、人物を木・家に接近させるという絵の描き方の中に表れているという理解も可能である。

この場合、樹木は無意識的な自己像というよりも、対象者の持つ他者像が表現されているとした方が考えやすい。統合型 HTP は、バウムテストのように一枚の画用紙に一本の樹木を描くものとは異なり、一枚の同じ画用紙の中に人物や家と併せて樹木を描く。すでに画用紙の中には自己を投映していると考えられる人物が描かれていることから、バウムテストと比較すれば、樹木に無意識的な自己像よりも他者像が投映されやすいかもしれない。そして外拡型の人が、人物を樹木に接近させて描くときは家族以外の重要な他者と、人物を家に接近させる時は特に家族との相互関係の中に基本的な充足感を求めているという解釈も可能である。

本研究は対象者が少なく、こうした解釈仮説が確かであるとまではいえない。今後の調査では、統合型 HTP の分類方法については、木寄り群、家寄り群、中間群、家の中群の 4 つに設定する方法に加え、それとは別の分類として木を家とを区別せず、人物が木や家と接近しているか離れているかという観点で接近群と遠距離群を導入して、複数の年齢層でロールシャッハテストの体験型との関連を調べることが望まれる。

**参考文献**

浅野正（2014）．統合型 HTP に表れる抑うつの心理特徴 ── ロールシャッハテストのうつ病指標と対処力不全指標からの検討 ──．人間科学研究，36，91-100.

浅野正（2015）．ロールシャッハテストの警戒心過剰指標と統合型 HTP の関連について．生活科学研究，37，89-95.

Exner, J. E.（Eds.）．（1995）．Issues and methods in Rorschach research. New York, NY: Routledge.

Exner, J. E.（2000）．A primer for Rorschach interpretation. Asheville, NC: Rorschach Workshops．中村紀子・野田昌道（監訳）（2002）．ロールシャッハの解釈．金剛出版 .

Exner, J. E.（2001）．A Rorschach workbook for the comprehensive system（5rd ed.）．Asheville, NC: Rorschach Workshops. 中村紀子・西尾博行・津川律子（監訳）（2003）．ロールシャッハ・テスト　ワークブック（第 5 版）．金剛出版 .

三上直子（1995）．S-HTP 法 ── 統合型 HTP 法の臨床的・発達的アプローチ．誠信書房.

根本旬子（1998）．統合型 HTP 法における 3 アイテム間の位置関係とロールシャッハ・テストの体験型との関連．ロールシャッハ法研究，2，33-43.

Weiner, I. B.（1998）．Principles of Rorschach interpretation. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates．秋谷たつ子・秋本倫子（訳）（2005）．ロールシャッハ解釈の諸原則．みすず書房.